

弱視者が体外離脱中（脳・肉体を超える意識にシフトして）に

完全な視覚を持った事例

齋藤 忠資

先天性全盲者が臨死体験中に完全な視覚体験をしたというケースは、脳・肉体を超える意識が幻覚ではないことの証拠となるが、重度の弱視者（法律上の完全視覚障害者）が体外離脱中に自分の周囲の状況をメガネなしに正確に見た事が判明すれば、これは脳・肉体を超えた知覚が幻覚ではない論拠になるであろう。弱視者の臨死体験者が、地上の周りの状況以外の状況を視覚体験している場合には（例えば、光の世界とか暗いトンネル等）、とても鮮明な夢を見ることもあるので、用心してここでは考察の対象から外すことにする。

すでに考察したように、¹⁾ 脳・肉体を超えた意識は、肉体の五感とは独立した自らの完全な知覚を備えているので、臨死体験では障害者はいない。従って重度の弱視者も体外離脱の時には、完全な視覚を体験するものと考えられる。臨死体験の世界では、メガネをかけている人はいない。この点については、特別な例がある。コルトンは3歳の時、病気で死にかかったが、彼はその時死んだ祖父に会ったという。年を取ってメガネをかけている祖父の写真を見せると、コルトンは「天国では誰も年を取っていないし、メガネをかけていないよ。」と言う。²⁾

代表的な事例を挙げよう。

① 「48歳の強度の近視の女性が、臨死体験をする（その時、メガネはかけていなかった）。麻酔医は子供を相手にすることが多いので、子供が緑色の上衣を着ている医者で見分けがつくように、深紅色のチョウチョのついた黄色の手術用の帽子をかぶることにしていた。私は体外離脱して、天井辺りから深紅色のチョウチョのついた帽子をかぶっている例の麻酔医を、とても鮮明に見た。医師達は私の頭の後ろにある機械に私をつないでいた。私ははっきりと見ることができたので自分で驚いた。私の頭の後ろの機械の数字を読むことができた。私はメガネをかけたのかしらと、私は不思議に思った。私は大きな蛍光灯のトップが汚れているのを見た。このことを看護師に知らせなくてはと私は思った。私はカーテンで仕切られた隣の小部屋の女性を見ることができた。回復してから、機械の数字が正しいことを確認した。」³⁾

この例は、強度の近視の人がメガネなしで肉体を超えた意識になった時に、はっきりと治療室の様子を正確に見ることができただけでなく、肉眼では見ることはできないものまで正確に見ることができたことを示している。

② 「生まれつき弱視で、メガネなしにはよく見ることはできない人が臨死体験をして、それまで朦朧としていた意識が突然鮮明になる（この時メガネなしに、以下の様子をはっ

きりと見る。) 私は私の肉体を上から見る。病院のガーニー、動き回る医療関係者達を見る。一人の看護師が連絡をすると、数秒後に二人の看護師が車輪付きの赤い医具箱を押して手術室に駆け込んでくる。手術室の壁は黄色で、壁と天井の端に沿って白いパイプが走っている。天井は白く大人の肩の高さまで黄色のタイルで、床は緑である。パイプの天辺には埃がある。手術室は看護師用の帽子をかぶった看護師が、私の頭の近くにおいて、私の両肩と頭を支えて、他の看護師に指示を出している。別の看護師が、カーテンのトップの引き出しをひねって開くのを見る。彼女はふいごのような袋がついたマスクをつかんで、手術付看護師に手渡す。彼女の手術室付看護師用の帽子は無地の青だが、低木林は緑で白いカーディガンを着ていた。このカーディガンの看護師は、別の引き出しを開いて、一つの小さなビンをつかむ。彼女は針をフタに突き刺し、その小さなビンから針へ液体を引き出す。そして、医師にその針を手渡すと、医師は私の点滴装置にその針に刺し込む。手術室付看護師はプラスチックのチューブを緑色のタンクに接続し、バルブを開ける。彼女はマスクを私の鼻と口にかけ、袋を絞る。医師がピンクの低木林帽の看護師に指示を出して、彼女はワイヤー付のテープを私の胸に貼り付ける。そのワイヤーは細長い紙にプリントする器械につながっている。医師はこの紙の端をつかんで吟味し、別の看護師に別の指示を出す。その看護師は赤いカートに行き、別の小さいビン付の別の注射器を満たして、これを私の点滴装置に注入する。」⁴⁾

この例では、メガネなしで手術室の状況を細かい点に至るまで鮮明に見ている。また、手術室には天井に向かっている銀メタルのアームがすべて反射していたが、私はその近くにいたけれども、私の姿を反射していなかったと言っている。また、私は叔父に性的暴行を数か月前に受けたので、体に触られることに拒絶反応をしたが、この時は私の体を手荒く扱われていても、何の反応もしなかったと述べている。

③ 「メガネなしには見えない(法的に視覚障害者)人が、突然、脳・肉体を超えた意識にシフトし、メガネなしに鮮明に上からすべてを見る。自宅のベッドのシートは緑と赤の格子縞のベッドカバーであるが、ここは白いベッドシートで、ベッドの左に高い金属製の棚(ケース)も自宅の寝室にはない。大きな机、他の仕切、多くの医療関係者、つやのある細動除去器、呼吸補助器、自分の体等を上からはっきりと見る。」⁵⁾

この事例は、自宅の寝室と病院は違うにもかかわらず、病院の様子を鮮明に正確に見ているので、夢ではないと考えられる。

④ 「重い弱視のため厚いメガネをかけている人が、心臓発作で入院。手術中に脳・肉体を超えた意識にシフト。メガネなしにすべてが鮮明に見えた。目を閉じている自分の体、色、手術室の外の病院のホール、防音用の天井のタイルの穴と同時に、床のタイルの複雑な模様が見えた。数えなくても天井のタイルの穴の数が分かった。私の母が病院の正面玄関から入ってくるのを、待合室にいる夫と二人の息子とを同時に見る。待合室の壁時計は4時7分(午後)を差していた(360度完全視覚)。回復してから、すべての点⁶⁾が事実と一致していることが分かった。」

この例では、肉体の五感では直接分からない情報を正確にキャッチしている。しかも 360 度完全視覚の例にもなっていて、肉眼では同時に見ることができない別の場所を同時に見ている。数えなくても天井のタイルの数が分かるというのも、肉眼では考えられず、脳と肉眼を超えた超感覚的知覚を示している。

⑤ 「近視の人が臨死体験をして体外離脱し、メガネなしに自分の体と自分の背後のドアの外を同時に鮮明に見た。」⁷⁾

この例は、360 度完全視覚を体験したという点で④の例と似ている。

⑥ 法的視覚障害者が 5 歳の時、湖で溺れる。突然、脳・肉体を超えた意識にシフトして欲するだけでどこにでも行けた。湖の周りや裏庭や小屋や芝生用の備品等をメガネなしに鮮明に見えた。回復した後、私はその湖の周りや裏庭その他が体外離脱中に見た通りであることを確認した。また、一人の女性が砂の上で横たわっている私に口を当てて蘇生させようとしているのを上から見る。その女性は白黒の水着を着けて、白いフランス菊と黄色のセンター付の水着帽子の下から赤い髪の毛が突き出していて、彼女の背中の上の帯の上には、一つの大きな黒子があるのが、メガネなしに鮮明に見えた。回復してから私は、体外離脱中に見たこの一人の女性の姿と行動が正確であることを確認した。⁸⁾

⑦ メガネなしには本を読むことができない人が突然、脳・肉体を超えた意識にシフトして、ベッドサイドで開いていた本を読むことができた。⁹⁾

⑧ 二人共強度の近視で厚いメガネをかけていたが、臨死体験をして突然、脳・肉体を超えた意識にシフトして、メガネなしでダイヤル、周りの状況を細部まで正確に見たと言い、記述することができた。¹⁰⁾

⑨ 法的視覚障害者の女性。出産時に多量出血し、臨死体験。分娩室に入る前に私はメガネを外されていたが突然、脳・肉体を超えた意識にシフトし、医師がしていることが鮮明に上から見えた。¹¹⁾

[註]

1)脳・肉体意識から超脳・肉体意識へ

2)T.バーボ、天国はほんとうにある、青志社、2011、204～205

3)K.Ring,Heading toward Omega,Quill,1984,42～43

4)www.nderf.org/sara-nde-4723.htm

5)www.nderf.org/stephanie-p-nde.htm

6)www.oberf/ruth's-obe.htm

7)www.nderf.org/cara-m's-nde.htm

8)www.nderf.org/marta-g-nde.htm

9)C.Green,Out of the Body Experiences,Institute of Psychophysical Research,1968,32～33

10)K.Ring & Cooper,S.,Mindsight,William James Center for Consciousness Studies,1999,160

11)J.Long,Evidence of the Afterlife,HarperCollins,2010,88